

巨大気球 十勝の大空を飛翔

活用広がる大樹町多目的航空公園

5月、8月に長期実験

指令管制棟、今月末完成へ

JAXA

【大樹】独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA、本部東京）は本年度、大樹町で科学観測用の無人気球を飛ばす実験を始める。町多目的航空公園では大気球指令管制棟の工事が進んでおり、今月末の完成が待たれている。JAXA宇宙科学研究所本部の吉田哲也大気球観測センター長は「大気球を安全に運用し、研究を推進したい。実験を通じ、多くの住民に科学への興味と理解を深めてもらえたら」と話している。（北雅貴）

JAXAが研究している大気球は、人工衛星やロケットと並べ、科学観測と宇宙工学実験に使われる重要な飛行体の一つに位置付けられている。実験では地上付近で観測できない紫外線や赤外線、宇宙線などを観測し、天文学や宇宙物理学の研究に役立てる。また、地球環境を守る上で才

SONホルや酸性雨の直接原因となる物質の採取、測定を行い、年変化のデータも蓄積する。従来の実験は三陸大気球観測所（岩手県・船越市）で行ってきた。1971年の開所以来、およそ400機の大気球を高度30～50キロ付近の上空に打ち上げてきた。2007年5月には6万立方メートルの気球に重量300キログラムの観測器を搭載、気球の最高高度である53・0キロを達成した。一方、この30年間ほどで観測機器や大気球の大型化が進み、気球を打ち上げるための放球場が必要。気球を確保できるのが大きい。風などの気象条件も実験に適している」と力を込めない環境が望ましく、大樹町はこれらの条件を満たす。同公園にはJAXAが設置した飛行船格納庫も整備されている。



三陸大気球観測所で行われた実験。好環境に恵まれた大樹町への移転で、研究などのさらなる促進が期待される



大気球指令管制棟の建設工事が進む町多目的航空公園。名実ともに、航空宇宙産業基地としての基盤が整いつつある

大樹町は85年に航空宇宙産業基地構想を掲げ、JAXAをはじめ、NPO法人北海道宇宙科学技術創成センター（HASTIC）、大学などの実験を受け入れてきた。昨年12月、同公園で小型無人飛行機の画像伝送飛行実験を行ったJAXAの穂積弘毅主任研究員は「町役場や大樹漁協など温かい協力のおかげで、実験を円滑に進められた」と振り返る。

町での実験は5月中旬から8月下旬までの年2回で、それぞれ約1カ月間を予定。毎回、大気球と観測機器の関係者など40～50人が来町、滞在する。伏見悦夫町長は「長年取り組んできた活動の成果が実った。宇宙の町として、大きなインパクトになる」と感激している。

道工大の佐鳥新・准教授に聞く

北海道発の人工衛星「大樹1号」は、早ければ01年度の打ち上げを目指して開発が進む。ハイビジョン並みの高画質となるハイパースペクトルカメラを搭載、レザータ通信で地上に画像を送り、インターネットを通して世界中に宇宙の視点「を配信する。将来的には農業分野への活用も期待される。開発の中心を担う

北海道発の人工衛星「大樹1号」は、早ければ01年度の打ち上げを目指して開発が進む。ハイビジョン並みの高画質となるハイパースペクトルカメラを搭載、レザータ通信で地上に画像を送り、インターネットを通して世界中に宇宙の視点「を配信する。将来的には農業分野への活用も期待される。開発の中心を担う

が進み、CAMUI（カメライロケット）なヒラメカメラが搭載され、大樹でも試験を行うという方針だ。「大樹」の名称は「北海道発の衛星にふさわしい名前」として命名された。佐鳥准教授は「ロケットと衛星の両方を開発しているのは国内でも珍しい。その特徴を生かし、北海道が声を上げ、全国に呼び掛けていくことが重要。宇宙開発を通して北海道発信していきたい」と意欲を見せている。

人工衛星「大樹1号」打ち上げ準備進む

「宇宙開発通じ北海道発信」



「HIT-SAT」の模型を前に、「大樹」の開発について語る佐鳥准教授